

資料翻訳と紹介 エヴァグリオス・ポンティコス『スケンマタ』

鈴木 順

本稿は、4世紀後半のエジプトを中心に活躍し、没後の異端宣告にもかかわらず東西キリスト教修道制の伝統に多大な影響を残した修道士・神学者エヴァグリオス・ポンティコス(345–399/400)の小品『スケンマタ』の試訳と紹介である。わが国では馴染みのない人物なので、作品の解説・試訳の前に、人名事典風に彼の生涯・主要著作・思想(神学と修行論)を略述する⁽¹⁾。

■生涯

小アジア・ポントス州(現在のトルコ共和国北部黒海沿岸)の小都市イボラで、345年頃、同地の村主教^{コレエピスコポス}⁽²⁾の息子として生まれる。少年時代、有名な教父・神学者であったカエサリアのバシレイオスやナジアンザスのグレゴリオスによって教育を受けられ、前者によって誦経者に後者によって輔祭に叙任された。一説によれば、バシレイオスの修道共同体の一員でもあったということが確証はない。バシレイオスの没後、首都コンスタンティノポリスの大主教として栄転したグレゴリオスの許に身を寄せる(380頃)。グレゴリオスが大主教職を引退し首都から離れた後も(381)、後任者ネクタリオスに仕え、エウノミオス派⁽³⁾との神学論争に活躍。382年突如出奔⁽⁴⁾。エルサレム郊外のエレオン山に修道院を構えていたアクィレアのルフィヌスと大メラニアの許に滞在。383年頃エジプトへ移住し、ナイル下流域砂漠地帯の修道集落ニトリアで隠修を開始。次いでケリア(385)に移り、引き続き修道生活を送るかたわら著作を開始したと推測される。同地において、アレクサンドリアの師父マカリオス・エジプトの師父マカリオスに師事し⁽⁵⁾、師父パンボ・「長身の兄弟達」⁽⁶⁾などのオリゲネス主義者達と交友を結ぶ。アレクサンドリアの大主教テオフィロスによって、ティムイスの主教に推挙されるが謝絶、一時的にパレスティナへ逃亡(391–394?)。ケリアにおいて神現祭の礼拝に出席後、死去。享年45歳(399/400)。死の直後、オリゲネス主義を排斥したテオフィロスとエジプト教会会議によって事実上断罪され(400)、ユスティニアヌス帝と第二コンスタンティノポリス公会議によって異端宣告を受けた(553)。

■教説(神学)

世界生成論

神は、ロゴスの本性(λογικός)とも呼ばれる清い知性(νοῦς καθαρός)を創造する(「第一の創造」)。これらは、互いに均質であり、一体性を構成していた。彼らは、神によって、神を知るために、本質的知識・ロゴスにむけて、一性・モナドである神と一致するために創造されていた。本質的知識の観想を怠ったロゴスの本性達は、原初における一体性を破綻させ、「運動」(κίνησις)を生じさせる。この「運動」は、一性たる神からロゴスの本性達を引き離すのみならず、彼ら自身の間の一性をも破綻させた。墮落した彼らは、知性という呼称の替わりに魂(ψυχή)という名を受ける。

ロゴスの本性達の墮落を憐れんだキリストは、無際限な墮落を防ぐべく、救済の道具として身

体と世界を創造する（「第二の創造」）。ロゴス的本性達各自の墮落の程度に応じて、天使・人間・悪霊の身体を付与し、世界に住ませる。

墮落によって本質的知識を喪失したロゴス的本性達に、神は、彼らの境涯に応じた様々な段階の観想を与える。これら観想の諸段階を上昇することで、ロゴス的本性達は、順次各段階に対応する身体と世界を通過し、最終的救済へと回帰する。

キリスト論

キリストは知性の一つであったが、原初における破綻「運動」(κίνησις)の際に、ただ一人、神のもとに踏みとどまり、本質的知識を維持しつづけ、自己のうちに神・言^{ロゴス}を保持する。このため、キリストは、ロゴス的本性達の救済過程において不可欠の役目を負う。またキリストは、「第二の創造」(諸身体と諸世界の創造)を行い、有体的被造物の中に「多彩な知恵^{ソフィア}」を置く。キリストは、第一の審判と将来の諸々の審判を司る。また彼は、自発的に受肉し、ロゴス的本性達を救済するべく、本質的知識を啓示する。なお、一連の救済過程において、墮落の程度の少ない者即ち天使達も、人間の救済に関与する。

終末論

ロゴス的本性達は、観想の諸段階を通じて次第に上昇し、霊的身体の保持を特徴とする天使的境地へと至る。この状態即ち「第七日」においてキリストの王的支配がロゴス的本性達の間に確立する。「第八日」にはこの状態が解消し、ロゴス的本性達は「キリストの相続人」から「キリストの共同相続人」へと変化する。即ち、あらゆるロゴス的本性達は、キリストと等しく本質的知識を共有するに至る。この段階において、救済の道具であった諸身体と諸世界は解体・消滅する。

■教説（修行論）

修行論

エヴァグリオスは、修道生活の階梯を「修行」(πρακτική)と「観想」(θεωρία)とに大きく二分する。修行とは、魂の情念的部分を諸徳の実践によって浄化する修行過程のことである。この過程によって魂は、不動心(ἀπάθεια)を獲得する。しかし、不動心自体は、修道の最終目標ではなく、観想(θεωρία)というより高度な営為に不可欠な前提条件である。

「観想」の二段階

浄化された魂ないし知性は、あらゆる被造物に隠されている神的事柄(λόγοι)―万物の背後に隠れる神の意志・業ないし神と被造物との関連性における霊的認識―を観想する。これを「自然的観想」という。これは、直接的な神の観想(「神智的観想(第一の観想)」)の予備的段階であるため、「第二の観想」・「諸存在の観想」・「自然的知識」と呼ばれる。この次ぎにくるより高度な観想は、「第一の観想」・「聖三者の知識」とも呼ばれる直接的な神の観想であり、修道の最終的目標でもある。この段階において知性は、限りなく神に近づき、聖三者の栄光を受け本来的かつ無形の輝きを放つ自己において神を観るとされる。

エヴァグリオス・ポンティコス『スケンマタ』解説

■表題

本稿で訳出する資料の表題『スケンマタ』σχέματα とは σχέμμα の複数形である。この語は、古典期の用例では、「考察・考慮・考慮の対象」などを意味し、教父作品においては「計画・目的」等をも意味する。しかし、それ固有の完結した思索と結論を提示しない本作品の表題を『考察録』などと訳せば誤解を生じかねないため、本稿では敢えてこの表題を訳出せず、原語を仮名書きで表記することとした。

■成立年代

エヴァグリオスの著作の大半と同じく、当該作品自体に具体的な成立時期や場所を特定する記述はなく、この作品についての古代の証言もない。しかし、当該作品が収録する金言の大半が、隠修士が修行生活において克服すべき様々な妄想—エヴァグリオスを含む修道文献の作者達はこれを想念(λογισμός)と呼ぶ—の分析と、修行生活の目標である観想(θεωρία)を論じていることから、ケリアでの修道生活を開始した385年頃から没年の399/400年の間であると推測し得る。

■想定される読者

序文や献呈の辞に類するもの—執筆当時からなかったのか伝承の過程で欠落したのかは不明—がないため、断定することは不可能だが、内容と形式から見る限り、エヴァグリオスの著作と思想に精通した修道者が読者として想定される。

■作品の形式

エヴァグリウスが好んだ金言集(Kephalalaia)の形式を取る。神論・キリスト論・知性論などを扱うグノーシス的部分(1-39)と修道者の心に去来する想念の分析を主題とする想念論的部分(40-62)の緩やかな二部構成となっている。第一部では、「AとはBである」という形をとる定義集的金言が多く、第二部では「想念のうち、あるものは…であり、またあるものは…である」という形式で導入される分類・分析的な金言が多く収録されていることが特徴となっている。しかしながら、これらの定義や分析が、一つの作品の中で有機的に統一され完結した論考を形成しているとは言い難い。エヴァグリオスの主要教説全体を知悉する読者を念頭に、彼の全教説の概観ないしは忘備録として執筆されたと思われるが、あくまでも推測の域を出るものではない。

■思想

作品の形式の項でも述べたとおり、本作品は、一貫した主張を体系的に提示するものではないが、エヴァグリオスの思想の根幹をなす種々の主題に言及している。本作品の個々の金言と他の作品の並行箇所との詳細な比較検討は、稿を改めて論じたいが、さしあたって第二部に着目してみれば、『修行論』における八種類の想念—貪食(γαστριμαργία)・淫蕩(πορνεία)・金銭愛(φιλαργυρία)・悲嘆(λύπη)・憤怒(ὀργή)・アケーディア(ἀκηδία)⁽⁷⁾・虚栄(κενοδοξία)・傲慢(ὕπερφανία)—の出現と交替に関する分析を前提とするが、神への様々な冒流の起源の背後に潜む想念の分析と由来(49)や八種類の想念の発端に自己愛を措定する(53)など、興味深い敷衍・補足を行っている点に注目したい。

■作品の伝承

現存する全てのギリシア語写本は、他のエヴァグリオス作品同様、当該作品をアンキラの聖ネイロス⁽⁸⁾の名で収録している。また、証聖者マクシモス⁽⁹⁾も当該作品を聖ネイロスのものとして引用しているが⁽¹⁰⁾、批判版を公刊した Muyldermans によって、本作品がエヴァグリオスの著作であることが明らかにされ現在に至っている。なお、シリア語圏においては、ネストリオス派の神学者でエヴァグリオスの注解者でもあった師父ババイ^(マール) (569–628) 以来、本来 600 の金言からなるべき所 540 の金言のみを収録する『グノーシスの諸章』(Kephalaia Gnostica) を補完するものと見なされてきた。しかし、現代の大多数の研究者はこの見解に対して否定的である。

■本作品の研究上の意義

本作品において最も注目すべき点の一つは、ギリシア語原典が失われごくわずかなギリシア語断片とシリア語訳等で伝承する神学・形而上学的著作『グノーシスの諸章』の並行個所が多く含まれ、難解な語句や表現のギリシア語オリジナルと思われるものが散見される点である。現段階において訳者が最も注目しているのは、本作品 (1) 及び (23) に見られる表現 γνῶσις οὐσιώδης⁽¹¹⁾ である。他ならぬこの表現こそが、『グノーシスの諸章』において、詳細な説明なしに神と等号で結ばれる究極の知識を示すシリア語の表現 ida'cā ityāitā⁽¹²⁾ のギリシア語での元来の形ではないか、と訳者は推測している。この推測が妥当なものであるならば、未だ十分な解明のなされていないエヴァグリオスの神学・形而上学の更なる分析に貢献すると思われるが、この問題については、機会を改めて詳細に論じたい。

訳出に当たっては、Muyldermans の校訂版を底本とし、Sinkewicz 及び Harmless と Fitzgerald による英訳と註を参考とした。[] はギリシア語原典にはないが読解の便宜のために訳者が補った部分、[=] は読解の便宜のため訳者が言い換えた部分、【 】 は本文中で引用または暗示されている聖書の箇所、() は原典のギリシア語である。なお、節番号は底本に付されているものを踏襲した。

エヴァグリオス・ポンティコス『スケンマタ』

(鈴木試訳)

(1) キリストとは、キリストである限り存在に関する知識⁽¹³⁾(γνῶσις οὐσιώδης) を、創造者である限り諸世代の諸ロゴスを、非体的存在である限り非体的諸存在の知識をそれぞれ有する。

(2) もし、人が知性の状態(νοῦ κατάστασις) を観ることを望むならば、自己から一切の表象(νόημα) を剥奪させよ。そうすれば、彼は己が青玉または天空の如き色【出エジ 24.10 参】をしているのを観るであろう。これは、不動心(ἀπαθεία) なくしてはありえぬことであり、類縁なる光を吹きつける神の助力を必要とするから。

(3) 不動心(ἀπαθεία) とは、穏和さと自制心⁽¹⁴⁾ から成立するロゴスの魂(ψυχή λογική) の平穏なる状態である。

(4) 知性の状態(νοῦ κατάστασις) とは、知性的な高み(ὑψος νοητὸν)⁽¹⁵⁾ であり天空の色の如きものである。その境地において、折りの折に(κατὰ τὸν καιρὸν τῆς προσευχῆς)⁽¹⁶⁾、聖三者の光が輝く。

(5) キリストとは、彼に舞い降りる鳩【マタ 3.16 他参】によって示される事柄を己自身のうちに保つところの、ロゴスの本性である。

(6) 香炉とは、祈りの折に (κατὰ τὸν καιρὸν τῆς προσευχῆς) 感覚的事物に関与しない清浄なる知性である⁽¹⁷⁾。徳に即しては第八日において一となり、知識に即しては終末の日に一となる。

(7) 非難すべき知性の接吻⁽¹⁸⁾とは、情念的で感覚的事物に関する表象である。將にこのために、救い主は弟子達にこう言っている「道すがら誰にも挨拶の接吻をするな」【ルカ 10.4】

(8) 氣概 (θυμός) とは、想念を滅ぼす魂の能力である⁽¹⁹⁾。

(9) 観想的知性は番犬⁽²⁰⁾のようだ。氣概の運動によってあらゆる情念の想念を駆逐する。

(10) 修行的知性は番犬のようだ。あらゆる不正義なる想念を威嚇する。

(11) 訓育 (παιδεία)⁽²¹⁾とは、現世的欲望と不信仰と不敬虔の否定である。

(12) 恐怖とは、理性的なものに由来する援助を捨てることである【知 17.12 参照】⁽²²⁾。

(13) 悪霊に由来する想念とは、思考において成立するところの感覚的人間 [について] の似像 (εἰκῶν τοῦ αἰσθητοῦ ἀνθρώπου) である。この似像によって知性は情念的に動かされ、密かに不法なことを言いつくすのである。更に、悪霊から次々と虚像 (εἰδῶλον) が侵入してくるのである。

(14) 隠修士とは、思考において形成する世界において (ἐν τῷ κατὰ διάνοιαν κόσμῳ συνισταμένῳ)⁽²³⁾、敬虔かつ義なるあり方【ティト 2.12 参】で行動する者をいう。

(15) 修行者 (πρακτικός)⁽²⁴⁾とは、神からの賜物を正しく利用する者をいう⁽²⁵⁾。

(16) 修行的知性とは、常に、不動心をもってこの世からの表象に立ち向かう者をいう。

(17) 知性が表象を把握する仕方は四つである。第1は視覚を、第2は聴覚を、第3は記憶を、第4は体質・気質を通じてである。第1の視覚を通じてのそれは、ただ表象を把握するだけである。第2の聴覚を通じてのそれには、映像を形成するものとしめないものがある。というのも、ロゴスは感覚的事物と可知的事物の両者を提示するからである。記憶と体質・気質は、聴覚と一緒に到来する。聴覚 [を通じての表象把握] の様に、両者とも知性に映像を形成したりしなかったりする。

(18) 諸身体のうち、あるものは同一本性 (ὁμοουσιότης) であり、あるものは非同一本性 (ἑτεροουσιότης) である⁽²⁶⁾。非体的本性においては、[すべてが] ただ同一本性である。諸知識においては [すべてが] 非同一本性的である。というのも、あらゆる観想のうち一天体のそれを例外として—いかなるものも同一なものではないからである。聖三者においては、[すべてが] 同一本性である。というのも、観想の場合同様に、何一つとして本質的事物に区別がないからである。又 [聖三者は] 身体の如く様々な実体によって構成されるのでもないからである。ここでいう実体とは、そこにあるもの—もしそれが本当に同一の知識を受容可能であったとしても—が何であるかを提示する定義の構成に資するものであって、非体的存在における如きものではない。

(19) 五感を通じて知性が想念を捉えるのであれば、どの感覚から最も絶え難いことが生じるかを監視すべきである。もし箴言の言うように、「悲嘆 (λύπη) をもたらす言葉が、人の心を惑乱する」【箴 12.25】のが真実ならば、[最も絶え難いことが生じるのは] 聴覚からであることは、明白である。

(20) 知性が修行にかかわる場合、知性はこの世界の表象のうちに存在する。知識にかかわる場合、知性は観想のうちに過ぐす。祈りのうちにある場合、神の場 (τόπος θεοῦ) と呼ばれる所の無形なる [光]⁽²⁷⁾のうちに、知性は現存する。更に知性は、諸身体において、同一本性と非同一本性を見出す。また、観想的事物においては [非同一本性を]、神においては [同一本性を] 見出す。

存在に関する知識 (γνώσις οὐσιώδης) は明白ではなく、それについては何一つとして変化がないゆえに、神に関する事については [それを知ることは] 不可能である。

(21) あらゆる誘惑のうち、あるものは快樂へ、またあるものは悲嘆へ、またあるものは肉体的苦痛へと人々を拘引する。

(22) 知性は、ある時には表象から表象へと動く。またある時は、観想的考察 (θεωρήματα) から観想的考察へと、更には、観想的考察から表象へと動くのである。時として、無形の状態から (ἀπο τῆς ἀνειδέου κατάστασεως) 表象あるいは観想的考察へと、又再びこれら [=表象あるいは観想的考察] から無形の状態へと移動する。このような事態は、知性において、祈りの折に到来するのである⁽²⁸⁾。

(23) 諸事物におけるあらゆる表象から離れて至高の状態にならねば、知性は自己において神の場 (ὁ τοῦ θεοῦ τόπος) を見ることはできない。感覺的事物についての表象によって知性を拘束する諸情念を脱ぎ捨てなければ、知性は至高の状態とはなり得ない。

(24) 悪霊達に由来する想念は、生成する事物に関与する魂の左目⁽²⁹⁾を失明させる。

(25) 神の場 (ὁ τόπος τοῦ θεοῦ) とは何であるか、聖ダヴィドは賢明にも教えている。彼曰く「神の場は平安に、神の住まいはシオンに創られた」【七十人訳詩篇 75.3】さて、神の場とはロゴスの魂である。神の住まいとは、現世的欲望から断絶し、魂の諸ロゴスを観察することを教えられた、光り輝く知性である。

(26) 祈り (προσευχή)⁽³⁰⁾とは、あらゆる地上的表象を破壊する知性の状態 (κατάστασις νοῦ) である。

(27) 祈り (προσευχή) とは、聖三者の光の下においてのみ生じる知性の状態 (κατάστασις νοῦ) である。

(28) 祈願 (δέησις) とは、知性が神に対して行う嘆願を伴った語らいである。

(29) 誓願 (εὐχή) とは、自発的に善行を行うことである。

(30) 執り成し (ἐντευξίς) とは、より大いなる者が神に向かって訴えかけることである。

(31) ハデス⁽³¹⁾とは、永劫の闇と暗黒に満ちた光なき場をいう。

(32) 知識者 (γνωστικός) とは、日雇いの労働者である。【ヨブ 7.1 参】

(33) 修行者 (πρακτικός) とは、報酬を待つ労働者である。

(34) 知性とは、聖三者の神殿である⁽³²⁾。

(35) 身体と合一した知性は、あらゆる世代 (αἰών) を観る者である。

(36) 不浄な知性とは、感覺的事物に関する非難すべき情念に時間を浪費する。

(37) 欲望 (ἐπιθυμία) とは、情念を滅却する魂の能力である。

(38) 修行者 (πρακτικός) とは、思考によって創出された世界⁽³³⁾において、敬虔かつ義なるあり方【ティト 2.12 参】で生きる者である。

(39) 観想者 (θεωρητικός) とは、自己の思考において、ただ知識のためだけに、感覺的世界をつくる者である⁽³⁴⁾。

(40) 想念のうち、あるものは動物 [的部分] に、またあるものは人間 [的部分] に、それぞれ到来する。前者は欲望と気概に由来し、後者は悲嘆 (λύπη) と虚栄 (κενοδοξία) と傲慢 (υπερφανία) に由来する。アケーディア (ἀκηδία) に由来するものは、前者と後者の混合したものである。

(41) 想念のうち、あるものは[他を]先導し、またあるものは[他に]後続する。前者は傲慢(ὕπερφανία)に由来し、後者は気概に由来する。

(42) 想念のうち、あるものは[他を]先導し、またあるものは[他に]後続する。前者は貪食(γαστριμαργία)に由来し、後者は淫蕩(πορνεία)に由来する。

(43) 第1の諸想念のうち、あるものは[他を]先導し、またあるものは[他に]後続する。前者は悲嘆(λύπη)に由来し、後者は憤怒(ὀργή)に由来する。実に箴言によれば「悲嘆(λύπη)をもたらず言葉は憤怒(ὀργή)を引き起こす」【箴15.1】のである。

(44) 想念のうち、あるものは非質量的であり、またあるものは少しく質量的であり、またあるものは極めて質量的である。第1のものは傲慢(ὕπερφανία)に、第2のものは淫蕩(πορνεία)に、第3のものは虚栄(κενοδοξία)に、それぞれ由来する。

(45) 想念のうち、あるものは時間[の経過]によって、またあるものは同意によって、またあるものは現実のものとなった罪によって、それぞれ消滅する。最初のものだけが自然本性的である。残りのものは自然本性に反し、悪霊的で、悪しき選択によるものである。

(46) あらゆる善き想念に対して、二つの悪しき想念が対立する。一つは悪霊的想念、もう一つは悪しき選択に由来する想念である。邪悪な想念に対するものは三つである。自然に由来する想念、正しい選択に由来する想念、天使に由来する想念。

(47) 想念のうち、あるものは質量を外側から掴み、淫蕩(πορνεία)に由来するものは身体から生じる。

(48) 想念のうち、あるものは魂の運動によって、またあるものは外側から悪霊によって生じる。

(49) 不浄な想念のうち、あるものは神を不正な者として、またあるものは不公平な者として、またあるものは無力な者として、またあるものは無慈悲な者として、それぞれ提示する。神を不正なりとする想念は淫蕩(πορνεία)と虚栄(κενοδοξία)から、不公平なりとする想念は第二の傲慢(ὕπερφανία)から、無力なりとする想念は第一の想念から、無慈悲なりとする想念は残りの想念から、それぞれ由来する。

(50) 想念のうち、あるものは我々修道者のもとに、またあるものは世俗の人々のもとにやってくる⁽³⁵⁾。

(51) 快樂はあらゆる想念に後続するが、悲嘆(λύπη)には後続しない⁽³⁶⁾。

(52) 想念のうち、あるものは、それらの知識に先立つ心像(φαντασία)を有し、またあるものは知識を有する。

(53) あらゆる想念の第一のものは、自己愛に由来するもの(ὁ τῆς φιλαυτίας)である。それに続くのは八つ[の想念]⁽³⁷⁾である。

(54) 想念のうち、あるものは必要によって、またあるものは共通の闘いによって生じる。

(55) 想念のうち、あるものは思考に映像を形成し、またあるものは映像を形成しない。前者は視覚に由来し、後者は視覚以外の感覚から我々に投げかけられる。

(56) 想念のうち、あるものは自然に即し、またあるものは自然に反する。後者は欲望と気概に由来し、前者は父や母や妻や子供たちに由来する。

(57) 虚栄(κενοδοξία)と傲慢(ὕπερφανία)の想念だけが、他の想念に対する勝利の後に生

じる。

(58) あらゆる想念に共通すること、それは、時間 [の経過] による消滅。

(59) 情念の運動のうち、あるものは記憶によって、またあるものは感覚によって、またあるものは悪霊によって生じる。

(60) 欲情に由来するものであれ、気概に由来するものであれ、悲嘆 (λύπη) に由来するものであれ、あらゆる不浄な想念は魂を拘禁する。

(61) ただ悲嘆 (λύπη) に由来する想念だけが、あらゆる想念を破壊する⁽³⁸⁾。

(62) 表象のうち感覚に由来するものは五つある。記憶に由来するものは十ある。もし善用されるなら五つは清く、人を悪く導くなら五つは不浄である。天使達に由来する五つは靈的 (πνευματικός) であり、悪霊達に由来するものは五つである。[即ち] 善い記憶と悪しき記憶に由来するもの、天使達に由来するもの、映像に由来するもの、悪霊達に由来するものである。これらのうち、二つ、即ち、悪しき記憶と映像を模倣する悪霊達に由来するものは邪悪である。[残りの] 三つは清い。無形なるものは二十八ある。

主要参考文献一覧

■底本

Muyldermans, J. [1931] “Note additionnelle à: *Evagriana*.” *Le Muséon. Revue d'Études Orientales* 44 : 369-83.

■英訳と注解

Sinkewicz, R.E. [2003] *Evagrius of Pontus: The Greek Ascetic Corpus. Translated with introduction and commentary.* Oxford and New York: Oxford University Press.

Harmless, W. & Fitzgerald, R.R. [2001] “The Sapphire Light of The Mind: The *Skemmata* of Evagrius Ponticus.” *Theological Studies* 62 : 498-529.

■エヴァグリオスの他の著作

Kephalaia Gnostica (『グノーシスの諸章』)

【シリア語訳批判版及び仏訳】

Guillaumont, A. (ed. & trans) [1958] *Les six centuries des “Kephalaia Gnostica.”* (Patrologia Orientalis, 28, fasc. 1.) Paris: Firmin-Didot

Practicus et Epistula ad Anatolium (『修行論 (修道士)』)

【ギリシア語批判版及び仏訳】

Guillaumont, A. & C. (eds. & trans) [1971] *Traité pratique, ou, le moine.* (Sources Chrétiennes, 170-71.) Paris: Éditions du Cerf.

【日本語訳】

佐藤研訳 [1994] 「エヴァグリオス・ポンティコス 修業論」(上智大学中世思想研究所編訳・監修『中世思想原典集成 第2巻 後期ギリシア教父・ビザンティン思想』平凡社 pp.29-81)

■研究論文等

Bunge, G. [1983] “Evagre le Pontique et les Deux Macaire.” *Irénikon* 56 : 215-27; 323-60.

Clark, E.A. [1992] *The Origenist Controversy : The Cultural Construction of an Early*

- Christian Debate*, Princeton, N.J : Princeton University Press.
- Driscoll, J. [1990] “A Key for Reading the *Ad Monachos* of Evagrius Ponticus.” *Augustinianum* 30:361-92.
- Guillaumont, A. & C. [1961] “Évagre le Pontique.” In *Dictionnaire de spiritualité, ascétique, et mystique, doctrine et histoire*, 4:1731-34.
- Lossky, V. [1944] *Théologie mystique de l’Eglise d’Orient*. Aubier
- 大森正樹 [1995] 「祈りの系譜 (二) — ヘシカズム研究 アケーディアとエヴァグリオスの祈り」『エイコーン』13:16-28.
- 久松英二 [1995] 「東方教会修道制における観想—ポントスのエウアグリオスを中心にして」『日本カトリック神学会誌』6:1-21.
- V.ロースキィ, 宮本久雄訳 [1986] 『キリスト教東方の神秘思想』勁草書房 (原著: Lossky, V.[1944])

註

- (1) 神学については Guillaumont, A. & C.[1961] に、修行論については久松英二 [1995] に、それぞれ依拠した。
- (2) Χωρεπίσκοπος: 「村主教」と仮の訳語を当てたが、実際には定訳のない用語である。都市から離れた農村部 (χώρα) でのキリスト教徒を管轄した聖職 (ἐπίσκοπος) と推定されるが、具体的な職掌や教会位階の中での位置付け (主教叙任を受けていたのか、それとも単なる司祭の名誉称号なのか) など不明な点が多い。さしあたっては, Amadou, R[1959] “Chorévêque et périodeutes” *L’Orient Syrien* vol.4 pp.233-240 を参照せよ。
- (3) 非相似派ともいう。エウノミオス (320/30–394) が創始。子は父と同一本質 (ὁμοούσιος) ではなく、全く異なったもの (非相似 = ἀνόμοιος) であると説いた。398年以降勅令によって著作が廃棄された。
- (4) パラディオス (『ラウソス修道者列伝』38章3節以下) によれば、さる貴婦人との不倫関係が発覚するのを恐れての行動であったという。
- (5) 二人のマカリオスについては, Bunge, G[1983] を参照せよ。
- (6) Οἱ μακροί: ニトリアの修道士, アンモニオス, ディオスコロス, エウテュミオス, エウセビオスの四兄弟。並外れた身長と学識の高さゆえにこの異名で呼ばれた。大主教テオフィロスのオリゲネス主義者弾圧 (400) によってエジプトから追放された。オリゲネス主義者達とエヴァグリオスとの交流については, Clark, E. A.[1992] を参照せよ。
- (7) 修道者としての進歩向上が実感できないことから生じる閉塞感・無力感・焦燥感。具体的な症状としては、修行場所・修行形態の安易な変更, 俗人時代の生活への郷愁や還俗への惑いなどがあるという。エヴァグリオスは、これを「真昼の悪霊」【詩91.6】とも呼び (『修行論』12及び『同』27-29をも参照), 八種類の想念のうち最も絶え難いものとする。的確な訳語をつけることが困難なため、本稿では多くの研究者にならって原語を仮名書きで表記する。大森正樹 [1995] 参照。
- (8) 四世紀末から五世紀にかけて, 小アジア (一説によればシナイ半島とも) における修道者共同体の上長であったと推測される。十世紀頃コンスタンティノポリスで成立した典礼用聖者伝には、彼に関する種々の伝説が記されているが、史料的价值は皆無であるため詳細な事跡は不明。神学・教会政治的には正統主義に属したらしく、このため、知的修道者に愛読されながらも異端宣告ゆえに伝承の危機に直面していたエヴァグリオスの修道文献が、ネイロスの偽名の下に流布することとなった。

- (9) 580-662. 東方教会最大の教父の一人。正教会では「表信者」の尊称で顕彰される。単性論と単意論を排斥し、これらの説の信奉者と激しい神学論争を行ったが、単意論信奉者であった皇帝コンスタンティヌス二世(630-668.在位 641-没年)によって弾圧され、舌と右手を切断され黒海南岸のラジカへ追放され同地で没した。第三回コンスタンティノポリス公会議(680-681)で名誉回復。単意説論争に関する神学書以外に、多くの修道文献を著し東方教会の修道靈性に多大な影響を残した。
- (10) Sinkewicz[2003], pp210-211, 284-287 を参照せよ。
- (11) 本稿では仮に「存在に関する知識」と翻訳する。
- (12) 直訳するなら「真に存在する知識」あるいは「真に存在するものについての知識」となるうか。『グノーシス的諸章』1.89;2.47;5.55;6.10 にこの表現がみられる。Guillaumont[1958] はこれを la science essentielle と訳している。彼の仏訳を踏襲して仮に『本質的知識』と翻訳する。
- (13) 真に存在する者=神に関する知識。エヴァグリオスにとって、神・聖三者のみが造られざる真の存在であり、彼が依拠するカッパドキア教父の神学において神の存在・本質(οὐσία)は、被造物の知り得るものではないとされる。Lossky,V.[1944] 邦訳 p.63ff を参照せよ。
- (14) 『箴言傍注』157 参照。不動心の前提としてのこれら二つの徳については、Driscoll[1990] を参照。
- (15) エヴァグリオスが好む表現である。『祈りについて』52 参照。
- (16) エヴァグリオスが好む表現である。『スケンマタ』6 及び当該個所の註を参照。
- (17) 『祈りについて』1;75-77 参照。
- (18) 『箴言傍注』92 参照。
- (19) 気概の本来的かつ自然な行使である。『スケンマタ』9 及び 10 並びに『修行論』24 参照。
- (20) 『想念について』13 では、気概と想念がそれぞれ牧羊犬と狼に譬えられ、気概の本来的な活用が勧告されている。
- (21) ここでは、修行(πρακτική)—諸徳の実践による魂の情念からの浄化—が、古代末期の倫理思想の伝統にならって訓育(παιδεία)と呼ばれている。『セクストゥスの金言』274A 及びボルビュリオス『マルケラへの手紙』34 を参照せよ。
- (22) 『祈りについて』97 参照。
- (23) 『グノーシス的諸章』5.12 ; 5.39 ; 5.41 ; 5.42 参照。
- (24) エヴァグリオスの術語。修行(πρακτική)によって情念を陶冶した者をいう。知識者(γνωστικός)—神の真理の観想に専念する者—と対をなして用いられることが多い。『知識者』1-2 参照。
- (25) 『コヘレトの言葉傍注』16 参照。
- (26) 「子は父と同一本性である」としたニカイア信経をめぐる、正統主義とエウノミオス(320/30-394)を中心とする新アレイオス主義(エウノミオス派・非相似派)との神学論争が、この個所の背景にあるのかもしれない。青年期のエヴァグリオスは首都コンスタンティノポリスにおいて、エウノミオスとの論争に従事していた。
- (27) Sinkewicz に従って φῶτα を補って読む。エヴァグリオスの神学体系において、祈りの境地—神の観想—とは、知性の本来的営為に他ならない。祈りに関して知性は神の栄光の反映たる自己本来の光を観るとされる。久松英二[1995] 特に p.9 以下を参照。
- (28) 無形の状態とは、真に無形である者=神を知性が観想する状態、即ち、祈りの境地である。この無形の境地としての祈りを中断する知性の落ち着きの無さについては、イオアンネス・カッシアノス『靈的談話集』10.13 を参照。
- (29) 『想念について』42 の冒頭と同一の文である。
- (30) 『祈りについて』3;15;16;35;84 等参照。
- (31) 『グノーシス的諸章』1.57;1.58;3.18;3.39;3.60;6.8 参照。
- (32) 『グノーシス的諸章』5.84 参照。

- (33) 『グノーシスの諸章』5.42 参照。
- (34) 『グノーシスの諸章』5.12 参照。
- (35) 『修行論』32「悪霊たちは、世俗の人々に対してはどちらかと言えば事物を通じて戦う。だが、修道者に対しては、多くの場合、想念を通じて戦う。」(佐藤研訳 p.55 一部表記改変鈴木) なお、『同』5では、共住修道生活と隠修生活、それぞれにおける誘惑の差異について論じている。
- (36) 『修行論』19「…悲嘆は現在の快樂であれ将来の快樂であれ、その快樂の挫折である。」(佐藤研訳 p.43 一部表記改変鈴木)
- (37) 八種類の悪霊によって教唆される悪徳、即ち、貪食(γαστριμαργία)・淫蕩(πορνεία)・金錢愛(φιλαργυρία)・悲嘆(λύπη)・憤怒(ὀργή)・アケーディア(ἀκηδία)・虚栄(κενοδοξία)・傲慢(ὑπερφανία)である。これらの悪徳の分析と対処方は『修行論』6-33及び『八つの悪霊について』『アンティレーティコス』で詳細に論じられている。
- (38) 『スケンマタ』51 及び当該個所の註参照。